2021.5.26
第６回 研究会
NEWS LETTER

国際教養学部　言語文化学科

前言

５月２６日に開催しました第６回の獨協大学国際教養学部研究会は，佐藤勘治先生に「『緑の大地を枯らす有害な草』～20 世紀前半メキシコ北部国境州における反中国人移民運動～」というタイトルでご発表頂きました。ご参加下さったみなさまに感謝申し上げます。

今号のニュース・レターは，発表者の佐藤先生に，発表後の「言い残し」分の補足をお願いするとともに，本学部が外国語学部言語文化学科だった時代，及びそれ以前のことどもをお書きいただけないかと無理を申し上げて，承諾していただきました。

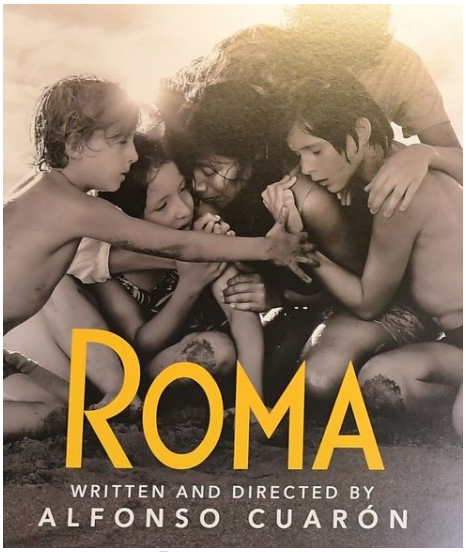
本学部は，２００７年に開設されましたが，その母体は外国語学部に置かれた言語文化学科でした。獨協大学は開設の外国語学部と経済学部から始まり，徐々に学部学科の増設をすめてきました。当然そこには，かつて大学におかれていた「一般教養」担当セクションの大学大綱化による解体も関わります。そうしたなかで，外国語学部に単一の言語学科ではない言語文化学科が設置されました。この学科が比較的安定的に経過してきたこともあって，これを学部に改組して現在の国際教養学部があります。

そのころからの教員は，すでに学部専任教員の半数以下になりました。学部のありようを考えるためにもぜひお読みいただければと思います。

発表後の一言と外国語学部時代のことなど

佐藤　勘治

１．キュアロン（クアロン）監督『ローマ』



映画『ローマ』のポスター

先日は研究発表の場を設けていただき、また、多くの人に参加いただき大変ありがたく思っています。発表では 20 世紀初頭のメキシコ北部を扱いました。メキシコは日本の 6 倍以上の面積があります。先住民族集団は 50 以上ありますし、発表で扱ったように移民もいますから多様です。ですから、メキシコのどの地域を知るかでメキシコの印象に大きな違いが生じるでしょう。

今から 40 年前メキシコ市で留学生活していたとき、メキシコ北部の住民 norteño は、メキシコ市のある中央部や南部の住民とは人種や文化が全く違うのだと指摘を仲間から受けてきました。のんびりとし、人のいい中央部や南部の住民と違い、北部人は米国人のように商売のことばかり考えている冷たい人たちだと脅すのです。研究対象にしたいと思っていた北部に行くことが怖くなりました。

メキシコ市内でさえも地区によって大きな違いがあります。皆さんには是非 2019 年アカデミー監督賞の映画『ローマ』を観てほしいと思います。舞台であるメキシコ市のローマ地区は、19 世紀末メキシコ市が拡大しはじめた時期に誕生した、中流層が多く住む落ち着いた街です。1970 年代に監督が少年時代を過ごした場所で、映画は自らの体験を下敷きにしたとされています。今でも街の雰囲気はそのままで、映画公開以来訪れる観光客が増えたと聞いています。

映画は、先住民出身の「女中さん」を軸にして、ある「白人」中流家庭の日常を淡々と描いています。でも、特別なメキシコでないことが重要です。「女中さん」と子供たちとの関係は、アステカ征服以来のメキシコの根本的問題を象徴しています。アステカの女性たちは、征服者であるスペイン人男性の面倒をみたのです。クアロン監督は、今、家事労働者の待遇改善運動を支援しています。描かれているのは個別の家族ですが、メキシコとは何かがそこに凝縮された家族なのです。私のメキシコ北部研究も、そのようなものになるといいのですが。

２．外国語学部時代の言語文化学科

2002 年時点の専任教員集合写真（獨協大学 2003 年卒業アルバムから）

国際教養学部言語文化学科の前身は、外国語学部言語文化学科です。国際教養学部の現所属教員の中で、言語文化学科誕生以前の教員組織である外国語学部共通科目時代から在籍している同僚教員は、今では数人になってしまいました。研究会で報告したとき、外国語学部の時代について自由に書いてほしいという声が聞こえてきましたので、以下、簡単に私の

個人的感想を交えて、変遷をたどることにします。

私が獨協大学で非常勤として授業をはじめて担当したのは、1988 年です。教職員番号の最初の数字二桁が 88 となっていますから、間違いがありません。その 3 年後、91 年に外国語学部の専任講師として私は運よく採用されました。当時すでにあった英独仏 3 学科には所属せず、共通自由科目担当で、メンバーは当時私を含めスペイン語教師 2 名でした。もう一人のスペイン語担当は霞先生（戦前にコロンビアで生活していたという）で、獨協大学開学時からの伝説的教師です。

2003 年ころの佐藤ゼミ（獨協大学 2004 年卒業アルバムから）

霞先生は英語学科でゼミを担当していたのですが、私はゼミなどもなく、自由選択の第三外国語担当という気軽な立場でした。その後、井口先生、中西先生（日本語）が加わりました。

当時の大学は、大学設置基準の大綱化によって改変が求められていました。1991 年、国は大綱化の方針を定めました。1994 年、獨協大学がその特徴としてきた哲学を中心にした教養部（例えば哲学は全学必修で担当専任教員も 4 人ほどいました）は解体され、各学部に分属されました。私が当時所属した外国語学部共通科目には、生物学、物理学、天文学、心理学、文学、歴史学、哲学、社会学、文化人類学、体育、教育学などの教員が旧教養部から移籍しました。一気に大所帯です。この外国語学部共通科目所属教員を中心にして新学科の設置が模索されることになります。

新学科の名称は「言語文化学科」とされ 1999 年に開設されました。学科としては、教養部の伝統を受け継いで哲学を必修にしたほか、スペイン語と中国語教育、留学生への日本語教育および日本語教授法、言語情報処理が新たに柱とされました。日本研究も重視されました。一方で、全学共通科目を主に担当する部署であることは変わりませんでした。しかし、一部例外がありましたが原則的に全員が演習担当となり、学科学生の研究教育指導に直接関わる体制となりました。

外国語学部内の新たな一学科を設置するにあたって、新規外国語教育部門を設けるのは当然でした。英独仏の既存学科とのバランスから、スペイン語と中国語を置くことにし、さらに英語と組み合わせて二外国語併習を特徴とすることにしました。

2005 年の新入生歓迎合宿

スペイン語は当時履修者数が激増していました。英語学科では第二外国語として指定されました。専任教員がいたこともあり、スペイン語を一つの柱とすることに異論はなかったと思います。グローバル化が特徴とされる現代世界において欧米以外の地域を射程に置く学科が外国語学部には不可欠でしょう。スペイン語圏は西半球にも広がっています。

獨協大学と言えばドイツですが、そうした欧米

以前のキャンパス・3 号館から部室棟（獨協大学 1999 年卒業アルバムから）

圏偏重のイメージから大学が脱するのがいいと、私の立場では感じていました。もちろん、欧米圏に集中することで大学としての特徴を明確にするという方針も一方ではあるのかもしれません。英語学科内には、すでに東南アジアやオセアニアを研究フィールドとするスタッフがいましたので、さらに、スペイン語圏や中国語圏研究の部署ができれば、外国語学部として充実したものになると思いました。加えて、今でもその名残がありますが、非常勤を含めた本学科の教員スタッフにはアラビヤ語や中東研究者もいました。欧米圏以外で専任教員を配置する外国語として中国語を選ぶことは、日本における社会的需要の観点からも自然な選択でした。現状から見ても間違いのない決定でした。ただ、将来的にも、スペイン語学科や中国語学科といった形にするつもりは、私は全くありませんでした。全国の大学における同様の学科はすでに飽和状態ですし、多様な人材の形成には〇〇語学科はすでに役割を終えているように思えたからです。

そのほかに、留学生受入を拡大したいという大学執行部（あるいは文科省でしょうか）の姿勢がありましたので、日本語と日本語教授法関連が拡充されました。当初、9 月に入学する留学生もそれなりの数が集まりました。関連して述べれば、前記した日本研究部門は、留学生向けというよりも通常の日本人学生を対象としたもので、その点で、教養学部へ繋がる将来像が見えていたようにも思います。外国語学部という枠組みの問題点を浮き彫りにするものでした。また、情報処理関連の充実は、当時の社会状況を反映しています。言語処理という点では、外国語学部との整合性があったでしょう。

以上のように、言語文化学科は外国語学部の枠組みの中から生まれて出発しました。そのため、教養部から移籍してきた先生方には、何か中途半端な学科だと映っていたでしょう。2007 年国際教養学部への移行には様々な要因があったでしょうが、それも一因だったと感じています。国際教養学部に移行してからは、哲学、言語学、心理学、教育学、歴史学、社会学、生理学などの「人間研究」的分野がより明確に位置づけられています。しかし一方で、韓国語も柱とされました。まだまだ、外国語学部の流れが生きています。

国際教養学部が将来どのような展開を見せるのかわかりませんが、現状は過渡期であると私は感じています。将来は皆さんに託されています。

2021 年 7 月 31 日
獨協大学 国際教養学部言語文化学科 共同研究室
048-942-8366
浅山佳郎・上野恵子・古郡百合香